



伊18
3702
27/14
卷 1

後立

ごんご

三浦可四郎

浪守の

右記

今

り

り

福徳過報彫序



此書ハ東都相ヶ谷翁の物語あり相
ヶ谷翁ハ古来稀の年成経く年月を
こやふ得実の翁やう假少と人の徳
を治ると 家業いと海雨中のほま
疾とまき登たなく翁のそふゆりそ
浮世の福をいへ人の事法のりたり

人少るゝまは借きらるゝを年外虫と
めきり〜反故の中よりつらつらと撰
後徳退報嘯と題し〜徒然の沖魁の
一助とあるんわ〜と云

東都

白雲子

明和十年と云月

福徳退報嘯卷之一

目録

近江扇金屋

福徳通報喇卷之一

近江原金屋

鐘のひびきと小籠が散るがごとく。あつたを
 おもふ家も小籠の音成いとふ。何をも皆是
 意毫の風雅なり。昔聖徳太子と守屋
 大兄といふこと成云やして併の像を海
 川へ捨せり。いふ中へ埋りたり。秦の
 始皇の時書成存へぬり。近たるやうと云
 太子の神利運ぶく併を橋池より堀

出と親音と海から綱にかけて引る。障を
 埋めたる。從校は山塚本津の里より山内へ
 と大坂へと通る。乃ふ山田村と云ふ。りり夏
 旱魃ハツカの時雨とひまらふ。右障の埋めたる
 云ふと嶽と二度歩くと別大雨と云ふ。海
 と所を川のたもとと成る。豊前国小瀬々
 崎と云ふあり。昭文の時波静なり。川波小
 瀬見あり。いふいせん。國より引ける。其
 不陰のとも。海士と名のん。ど。髪元の大鏡

と障の影。引通し大勢人ま知りてま
 やらふてま上げなれ。髪元の大鏡中を
 よりぬつ。切きく大鏡のう。はま。こくふ
 かりてあけま。な。い。い。より併縁を
 堀出さ。裏店より八塔子。な。を堀せ。構
 子のたまの。い。海代乃。建立と。三井さの
 鏡と湖水へなげ。こんた。と。秀御の揚さ
 せ。も。た。く。見。へ。たり。海中。小宮殿。う。り。て
 影。ま。と。り。中。是。い。去。ら。古。事。後。海。鏡。と。り。人

のまふ新宮の痛棟の事をりみとあり
今よひとる御物事往ふ事のかあふ
團をれが流るゝととと。秀の種は連立
波ささるゝが。百足退治の事へいかに石山
岩洞寺のまふ大蛇の子とたせと
百足といふ長みさふとる百足飼食ふ
さまろく蛇の子とたさく喰ふとささでも長
さ後さればむたろひ小後く。津田の橋
へぞく鯉餅ども吞込。伊勢指ふはと腹

乃中よあたるのふあつゝおとのさろりある。大
蛇の子をさあもて志根とはのりにより
火煙を吹させ。百足あはは百本たる松
の屋よふ耀つ。双方のふ合火事場のや
あといつるべ。ふくと澄りくく遊るを
吹上げの振のやふいん。其のつらさを
夜毎くは強くゆふ昼れかせだの隣りあ
かりゆ。武勇烈愛秀は。ふ事親王と名
宗胃と米か。より一かふ射毎く名試

ふけい一人を太の所の名を元歴代百姓細
おのぞこ助など。百足退治を頼たりと見
へたり秀の武威盛んたり人々ん歴とく
大百足を退治して名を流されたり。勢ま
で貫口をいへ依より米強はまると申ふは
元と浪多稻の妻例及び石山をこの百姓
清忠のためと秀郷存命の内思ひふ持
運びしとのと見たり。家も近江湖水の
系ま系まの入はる後山治をまるとして力をとられ

たる角力取らるるをいへり及びと系大坂ふ
くも園丸をくわつてむ志やふふとてし
が身とい拾余ふより角力をやめくわし
乃田加とゆくく子伏せ来て惣代と治助
とて北に大蔵ふたり三人力をとりけりども
親治をま治助ふやあはれハ角力ハ役ふたゑ
との四十とてハ何れぞたなても孫も足
と流きて肩系のもう。質物を流し釋め
かりあふ百姓といふるやういふ治

助者の深く百姓を勤めれども治助はく
 思ふに田畑を治りて朝夕お暮らされ
 二親ふ系とさせしむる事なきこと人
 小へ深く強くして當ふ此竹生時無試天
 へ移れど想け朝夕礼拝あるも今親を
 のかゝると年の暮るる門才と何色か大坂
 へ下りて世にたたりたるを救はれた
 おくはれとされおふかくも治金と名
 きばも治金と親としく進むくせめく親の

こと一體のわがあはれおくとおせたりと
 先湖水の舟を舟の業祖あるなりとも
 て見ん遊糸糸のよのたたのんぐ水もふたり
 が又海へもなぐ舟物と治んで通ひ念ひ
 同屋舟合と舟治助の理智候たり男と
 思ふおれられまが。いつか大坂高橋を唐
 令屋の付流八た境の二三人連あく。加賀法
 へ買物用まふり遊大津の同屋へあつ糸
 糸ふ系たり。後おはるすいつとねむ。同屋の

手代事いすい系舟り来て居すと。是治助友
は長形屋と二人業せすいかに云。治介やハ
者とい追風がよめござり後と西を吹く云。別
ハ長形屋をなハす。志かぶる業やさんと同屋
へも睨もして居る。大坂の長形屋とすく愛
物と念付入も此多業粉の火不まの事子屋
くんで又くろい前業茶を入も此小用を茶
すくあゝとあゝを茶茶をくも能あゝとあゝ
ふ倍くハ大徳のまゝに依びいすい念のふれを

治助ハハあゝも此國船の洋用もは此のまゝく
うゆふ私ハへたはばい子業まをよ。此此をい
いをも物りて者くく上中をく云。ハ大徳のまゝ
よりいもく大徳物由まハ此のまゝにゆふあゝ
まゝいも云。治助ハハはまのまの入口もく治若
史と云たは絲を中を親治をまハ長い時を
角力あゝく鏡心と申す。たと此とハ大徳
字く大坂堀江もくいん人じやゆりふハ若
ねやさんとて舟より抱上くも別をいふ。後



竹
み



水のてい
治
三人の
あふの

親治を更へともち坂氣が足すしたる彩んく
大舟の御が致して見たりと云はれと云はれ
すくぬわどまひの時を圓地をバロロ老
のあふふあふのや出する事なきいたる
よむゆうと云はれ湖水ハて致ふさけて了致ふ
富士山が出来たると云あうとて湖水てあ
ふとされればハいつ思とては洗きふて富士山
へあふ合点のり思事とおとくともを事ふ
事路とれハ回答ふ及びたといふ。叔八月末の

成りまじ。彼唐金屋ハ獲つ三人はと云くは舟
方へまき。やましく是ハよふぞは出さずしたと
ゆゑなごらんよと推つらぐ庭とくやうまうこ抄ま
でとむ切と打やうととむと云く。親治を更
ハ致とわさげくいと切ハ湯ハ出入と致と
よ赤のそむ切とよまをんとやうく蓮葉の破
きたやうふとむ切と打てとてなけふと云バ
切ハよまの着表粉ゆくかをまわりあるそれバ
其味付の介と致しとハ獲つとてめ二人た

小坂山小坂入候より仰りき。此の御朱の筆
 てう存り候と云板打候おまゝと云うりあて
 考出と云。去の能おしせしり毛はひふむおやく
 志やと猶の髪やらんるやうなと。惜くたがめて
 八右衛門くたごの後の屋敷おまははく後屋
 候と云治助と云うめ兄弟と云ひりしはか
 候ふまゝくふり申せしとの政と云うおびて押
 せとひよしくと云へ先は舞く利あて
 候事うれと應なりうと候くと云へ候り

の池をよと四方山の御朱をよと云けふが。親化
 さまお出申す候方へ此の御朱ひがら候申す。世傳
 治助めが大舟の御朱と云う候て見るとお
 ひまこと。大坂へ此の御朱と云う候て此の御朱うらふたり
 したまはてと下まをいしとて思ひ入る候ふも
 八右衛門御朱三人たふおふと承知いたしてあ
 千貳百石千貳百石お玉上り奥及南御朱へ
 とおふも御朱と云。いざきへなりとも承知ふ
 まはた候と云。三三奉り御朱の御朱もたれた。

うじおとあとも、烏丸孫バなまゝと云。治物と
そしぐ、何ぐさて名物を後でもはませまとも云
物うへ^{あす}の連^{つと}立て大詰へしりと云ふは、母親も
怪び及申を籠を極小として鬼ころりの酒を
おとふなとりののまら極小として射の部をおと
。當所の名物てうたう酒よりしりく馳走を
つといなり。治助のまい糸入はてゆり物大詰へ
つゝあつあつバ二人客をよきまゝしたといと。
同座を頼むるも、その場のめあをうらむが其

て指のあを頼むるも、あせたらがよといふ極く
治助怪し三人の客をへと春込せせつ時不記
きあを交なしてそこへの難もあざといと
能くやせせ私小あつ又津へも三人の柳より
どもと自分の志をうつつあふりりるまの由
かたいくはせよる。八た道つて又津の同座へも
くの着物に追付あり海をよは見人の乗格へ
出してきつと頼みて。まより伏見へも大坂へ
のちの船小あつてきつた大坂へはともぬ。

史く乃周向をか附仙志望りの千六百名後
任者丸字を史く云沖紅丸と称んご治助を
宗組ありて二三年ハ飯焼丸と名ししの後
也戸月紅丸の権丸親任とも称せ被是日殺
立色バ紅丸の病乃移りしとて吉日と見て大坂
と宗丸を四圍と存ふ見て和方浦紀伊浦
行勢の川邊へ赤丸がりしとて同屋へ揚る
病丸と渡し日和紅丸とて病丸内小治助親
任へ紅丸と名り右神を極へ赤病といしと後

と云勝手知く病丸バ馬と助といは乃めくま
系てこもく云なれバ病丸とくふかあより何人の
隙といひて二欠りみ系て身り病丸事得り
なり治助おとふ甲の病丸とてかき事あして
と金子のまあまはくひますふん安く系り
し事と名り助といはれと云字を史く是より
昭小傳く傳馬紅丸とて平山小出おや紅丸
系せなれバ日和紅丸とて平山とより一の
はへいづく日和紅丸とせんそ後とてとせ帆

せしむげのの津へまゐり情を汲りて抱
びぬまじき浪風をこころひききと後
らる思ふも後さういふぬく帆柱のやふふ
はく浦くみるしく涙もあはく秋日は
南船へと行治助を思ふ後あはく大海を
廣ひまじや父の思ふもこころいふ
母の思ふも海流しくいふものはふ
と思ひ二三年は思ふぬく船の勝ると思ふ
しに奥にへあはくこころいふ

ふ船へ船をりして船に坐るまの陸へよつと
買積の米と材木をかひ二三年其西も遠海
より或は船の朝飯の米をさだめ治助は
船へ下りて米をさぐく潮の荒をたして流さ
ざる親船の大桶ふき水のものをさぐく柄長
で潮汲み沖の方より高く暮るも先さるもの
さむしくさして波も浮んで海も余りも橋廣
く成る傳る船の船側をさぐり合も流ゆく
右柄長の桶柄をさぐりこころいふ

片までよ〜とあまのべ〜と忍いおつと傳るれ
 簀板の上へはらも。月程ふ見れば火赤るのか
 けの中ふこ海うみく白く黄ふ光る。そして思系
 ありおろる波ふ浮んぐ流きしよまばきしな
 みとせよ先つぬく垂たがよいと志おんを
 ぬぎしは〜板子の下へ入垂夜ふけ人志づ
 まろく造の切繩どもとろく傳るねへちり
 件の石ころをさきおんたふ造包みして忍び
 入たる棹の内へ入垂さつ〜忍神おく目〜乃

用向を法とめさかくして大坂へ志をれより向
 屋〜へ着物よげます〜ふ必なきバ。沖船
 の親仁へ頼ひ圖えへ集てすのりつなとやせバ
 沖船に三四年と法とめ〜事なれ〜いてま
 さお連る月を貴父の色出入十日を〜あ〜
 仰〜まよ。び船とたつお〜道る〜まかと云法
 助ハ候ひ親仁とほ〜め系組〜へ候えして
 忍者と石〜病と成宵有ふ他る。親仁〜ハい
 うふ法助病がま〜見田り積あ〜六銀小替

てとつくりぬと云。治助やんはうらたう必え
 の庄屋屋いよこし一はまてとよいおどふ
 浦へいしてとく一魚山石小蔵をうたなど見
 付たふお持て来てくまこくおされふ。仙臺
 の後で飛ちうのよむ石をむらいます。たごを
 おくあつと云。むとして皆くお徳お持とお
 夜をうの宗合おふあつて。聖朝伏見へ
 忌まなして大はへ悪同屋屋へともまおれ
 ばぬ。治助屋久い方うらうじやとよふおまを

云て石地へ出米京籠となつぬおまの竹生徳
 弟孫かり切あ今おまお云てまもの男へ宗
 せんとおまへお。治助うまうく竹生徳へも
 弟孫ぬたう。進びおま。まおあおくま
 系へまあ親ともおねふ事限りなり。おまも
 とねひおら母親の治助が月代へおまがりお
 うをねひひる。二三日休んど親にへ右の石
 ころを叫ぶまをこれの不思議とて先二三合
 おどひ孫うり也。錫物所不見せんと云。進

江ハ鑄物師多々有申てても大さるる鑄
物師不見せられバ南鑄とて三つをいの令
とや極かきも飾りあまはが白銀と交りて
見へる吹分を志よと云ふ極ふして下建
れむ棹令あしてかさふたといやうふ志ま
志よとて長八七寸斗の棹令ふ吹。白銀を
三分通英令八七分あり治助系へ持やう
令銀賣買の人不見せられハ令計百三拾五
通用小刺と引きくくまらるる三合程

がび令ふがたりと親子兄弟はあつた
あつた。何々の石ころハ遊々志はふ吹分
くも〜んと先通用令の物種ハ毎日大板へ
買上げ回廻を買ととあ。津く浦くの橋子
ハよく知たりあへはく買はこして大さ
あり身と成りて近江の厚令屋とて長
老の名を上げふきか

福徳退報嚙卷之一次

